

本発表は、現代フランスの哲学者アラン・バディウ（一九三七年生まれ）の美学的思考を明らかにするものである。一九六〇年代から本格的にはじまったバディウの活動は、哲学のみに留まらず、政治についても積極的な発言が見られるほか、小説や戯曲も執筆し、さらには俳優の顔も持つ。また、その哲学は、とりわけ二〇〇〇年以降影響力を増すようになり、現在では世界中で研究が進んでいるほか、本国フランスでは、高等師範学校でバディウの薫陶を受けた新世代の哲学者たちが活動を活発化させてもいる。一方で、日本における研究状況に目を向けると、著書の邦訳に限れば、単著だけですでに一〇冊を数えるものの、『存在と出来事』（一九八八年）をはじめとする主著が軒並み未邦訳ということもあり、その哲学の全貌は、いまだ十分に知られているとはいえない。

バディウは、哲学の条件として、科学、芸術、政治、愛という四つの領域を挙げる。すなわち、彼によれば、このうちのいずれが欠けても哲学は雲散霧消する他ないというのだ。本発表では、この四条件のうち、芸術をめぐる考察を中心に検討することにより、バディウの哲学における美学的側面を明らかにしたい。

バディウの芸術論の要は、それが「芸術と哲学が従来とり結んできた関係に再考をせまるもの」であるという点にある。また、この再考のための手段として彼が提起するのが、「非美学 [inesthétique]」という概念である。彼は、「美学」に代えて「非美学」なる語を提案することによって、従来の美学的思考に根本的な異議申し立てを行うのである。

わけてもバディウが批判的なまなざしを向けるのは、哲学が芸術を思考の「対象」として扱ってきたという、その関係性である。彼によれば、従来の美学においては、哲学が主、芸術が従という形で、ある種ヒエラルキー的な関係が温存されており、さらに、芸術についての真理は哲学によって生みだされるものとみなされていたという。それに対してバディウは、芸術とは、思考の対象ではなく、それ自身が「思考するもの」であると述べる。さらに、その真理は哲学によって生みだされるものではなく、芸術とは、それ自身が「真理の過程 [procédure de vérité]」を体現するものである、とも。

発表の中では、以上のような主張に集約されるバディウの芸術論を、関連著作を参照しながら、また、彼の哲学総体とのつながりも射程に入れつつ、立体的に浮かび上がらせることを試みる。それは、揺籃期にある日本のバディウ研究のみならず、とりわけ二〇世紀以降の「美学」の地位や、さらには「芸術」概念をめぐる諸議論に対しても一定の寄与となるだろう。